

2022年5月25日 (火)
18:00-20:00 (開場17:30)

会場：明治大学駿河台キャンパス
グローバルフロント1階 グローバルホール

主催：
明治大学情報コミュニケーション学部
ジェンダーセンター
03-3296-4436 / gender@meiji.ac.jp



瀧瀬あや(映画監督)

たったひとりの世界では、
自分は見えない。
道草をしながらふたりで
歩く散歩は、この世界とつな
がり、相手の瞳に自分を映し
出す時間。
こんな時間をすべての人が
持つことができたなら、わた
したちはもともと優しくな
れるだろう。

はみ出していく。 よし、はみ出していこう。

暮らしの場所を限られてきた人たちがいる。自閉症と重度の知的障害があり、自傷・他害といった行動障害がある人。世間との間に線を引かれ、囲いの内へと隔てられた。そんな世界の閉塞を、軽やかなステップが突き破る。東京の街角で、介護者付きのひとり暮らしを送る人たち。タンポポの綿毛をとばしブランコに揺られ、季節を闊歩する。介護者とのせめぎ合いはユーモラスで、時にシリアスだ。叫び、振り下ろされる拳に伝え難い思いがにじむ。関わることはしんどい。けど、関わりなくなることで私たちは縮む。だから人はまた、人に近づいていく。

一人はさびし、ふたりで歩く。
雨は降る、陽は輝く。人は泣き笑う。

<知的障害者の暮らしとは？>

知的障害がある人の暮らしの場は広がってきていますが「重度」とされる人の多くは未だ入所施設や病院、親元で暮らしているのが実情です。

2014年に重度訪問介護制度の対象が拡大され、重度の知的・精神障害者もヘルパー付きのひとり暮らしが出来る可能性は大きく広がりました。

そんな中、16年夏には相模原障害者殺傷事件が起きました。この街で誰もがともにあるために、新しい選択肢を見つめてみませんか？



2018年/95分/16:9/カラー/日本

監督・撮影・編集：穴戸大裕 / 音楽：末森樹 永原元 / 音響構成・整音：米山靖 / 宣伝デザイン：林よしえ / 宣伝イラスト：木下ようすけ / 題字：岡部亮佑

特別協力：全国自立生活センター協議会 / 助成：公益財団法人 キリン福祉財団 / 企画・製作：映画「道草」製作委員会

お問合せ：映画「道草」上映委員会 Tel: 080-3457-8833 FAX: 087-883-6570 info@michikusa-movie.com http://michikusa-movie.com/

大学という知の空間では、知的におくれのある人々の存在はなかなか見えにくく、社会的にも承認された存在とは言えない。それどころか、昨今の事件の犯人像と発達障害とが重ね合わされて、ますます排除される存在になりかねない。

こうした人々は成人するとかなりの割合で入所施設で生活することになり、生涯閉ざされた環境に置かれる。それは社会的に必要な措置と考えがちだが、当事者の人権という観点からは問題視せざるを得ない。

彼ら／彼女らが入所施設ではなく地域で普通の暮らしをしていけるように支援する人々がいる。映画ではその実例のいくつかを追いながら、様々な人々の生き方を排除せずに共生社会を実現するという意味を問いかける。

主催：
明治大学情報コミュニケーション学部
ジェンダーセンター
03-3296-4436 / gender@meiji.ac.jp

2022年5月25日（火） 18:00-20:00（開場17:30）

『道草』

上映会 & トークイベント

会場：明治大学駿河台キャンパス
グローバルフロント1階
グローバルホール

暮らしの場所を限られてきた人たちがいる。
自閉症と重度の知的障害があり、自傷・他害といった行動障
害がある人。
世間との間に線を引かれ、囲いの内へと隔てられた。そんな
世界の閉塞を、軽やかなステップが突き破る。
東京の街角で、介護者付きのひとり暮らしを送る人たち。
タンポポの綿毛をとばし ブランコに揺られ、季節を闊歩する。
介護者とのせめぎ合いはユーモラスで、時にシリアスだ。
叫び、振り下ろされる拳に伝え難い思いがにじむ。関わるこ
とはしんどい。けど、関わりなくなることでは私たちは縮む。
だから人はまた、人に近づいていく。

（公式HP <https://michikusa-movie.com/about/>より引
用）



菅戸大裕監督…
映像作家。1982年、宮城県生
まれ。学生時代、東京の自然豊か
な山・高尾山へのトンネル開発と
それに反対する地元の人びとを描
いたドキュメンタリー映画『高尾
山二十四年目の記憶』（2008
年）を製作。東日本大震災で被
災した動物たちと人びとの姿を描
いた『犬と猫と人間と2』動物
たちの大震災』（2013年劇場
公開）、人工呼吸器を使いながら
地域で生活する人々を描いた『風は
生きよという』（2016年劇場
公開）、知的障害がある人の劇場
施設での人生を描いた『百葉の
さやま園の日日』（2016年製
作）がある。

大学という知の空間では、知的におくれのある人々の存在はなかなか見えにくく、社会的にも承認された存在とは言えない。それどころか、昨今の事件の犯人像と発達障害とが重ね合わされて、ますます排除される存在になりかねない。
こうした人々は成人するとながりの割合で入所施設で生活することになり、生涯閉ざされた環境に置かれる。それは社会的に必要な措置と考えがちだが、当事者の人権という観点からは問題視せざるを得ない。
彼ら／彼女らが入所施設ではなく地域で普通の暮らしをしていけるように支援する人々がいる。映画ではその実例のいくつかを追いつかしながら、様々な人々の生き方を排除せずに共生社会を実現するというこの意味を問いかける。

参加費無料・事前申込制

受付開始：2022年4月16日（金）～定員満了次第受付終了